

木村緑平秀句鑑賞（その2）

佐瀬茶楽

年の夜おしめ火鉢にかけてねる

こんな生活、こんな赤裸々な生活は人の心をゆさぶる。〝厠雑巾やぶれ秋深うなる〝、〝すき腹ごまかして朝の厠ふく〝、〝頼みもせぬ八十まで生きおしめを洗う〝、〝月明かりで洗い竿にかけておく〝、〝ゆまりさせる月が出ていてくれた〝。緑平は際限もなく生な生活体験を表現した。人の心をゆさぶる句である。〝元日ひるからおしめ干す陽が照る〝、〝おしめまだ乾かぬのもあって日が落ちる〝、現実の生活を克服し切れぬ、そこに諦観がある。深い嘆息が知らずに出るだけである。涙が出てしまいうような句が並ぶ。

ふつと死にとうなりつらゝかむ

ちよつと観念的なものがあるが、強い衝撃に打たれるものがある。

雪ふる音のふたりとも目がさめている

〝寂みしい〝というような感傷や悲痛を越え

ている。何か小春のようなあたたかさとも明るさの心境に到達した二人が感じられる。そして緑平が〝雪か〝と言うと、奥さんが黙ってうなずき、二人共雪の降る音に聞き入っているようである。

年の夜残っている歯みがいとく

いくらもない歯それもボロボロの歯をみがいておく、その生への執着と徒労を自嘲している句ではない。勿論そんな気持もいくらか心の表面にはあろう。それより、残された歯に対するいたわりと、感慨、それに本質的なものを希求する抑圧することの出来ない意欲が感じられるのである。

生きねばならぬ足袋つくろうておく

〝死んではならぬ〝、〝生きとらねばならぬ〝のである。インクをペンにつけて書いた俳句でなく、魂をペンにしぼりつけて書いた俳句である。〝愛する者のために〝、生きとらねばならぬのである。

春の日のあたる板の間をふく

つつみきれぬ緑平のよろこびが見えるようである。やつと長い冬を越して太陽の恵みの中に

とけ入った緑平である。これからは病人の妻もよい方に向くだろうと。

春にする雨家のまわりの木にふる

冬の間冬眠していた木も、暗かった空も、人間の凍りついた心も、みんなとけ流して春にしてしまう雨。その雨が家のまわりの木にふり始めたのである。家のまわりの木は、その木の芯までも春の雨に濡れようと雨に自分をまかせているのである。心がほぐれていくような和らぎが感じられるのである。

手のあかぎれもいくらか日が永うなる

これが緑平のよろこびである。いくらか日が長くなつたことか。これから冬のうち痛く悩まされたあかぎれもよくなるだろう。そして冬のうちカサカサに荒れた手もすべすべにきれいになるだろう。そしてたら病人の妻もいくらか少しづつ良くなつてくる。そう考えると緑平は子供のように嬉しくてならないのである。

病妻に白い雲見せておいて街に出かける

悲しいことだが、これも緑平の幸福の一つである。到底良くなる見込みはあるまい病気の妻、その妻が、この頃、もしくは今日は体の調子が

良いのであろう。ようやくホツとして緑平は、病人に好きなものとか、病人に必要なものとか、或いは日常生活品とか、それらのとか、これらの物を買うのに街にでかけたのであろう。見とりの暗さからもその時だけはいくらか解放されて緑平も春光の明るい陽をあびながら白い雲を見たことであらう。

春の風病人に見せておく

風も、草も、花も、みんな病人の妻に見せて妻と共に見てよろこんでいる緑平である。

寝顔春の風に開けてやっておく

緑平のやさしい愛情、すやすや寝ている妻の幸福な寝顔が見えてくる。

慾も得もなく梅雨の髻のびさせておく

“どうなりとして下さい”とまかせたような句である。緑平を丸堀にして叩きつけて見せてくれる句である。

月がよく病妻も白いウチワもつ

満月であらう。“いい月だよ”、“いい月です”ね”、緑平とその妻は月を見ている。二人共白いうりわをもっている。人間でありながら人

間をはなれたような宗教的な雰囲気を感じられる。十五夜の満月と、黒い二つの人間の影と、白いうちわという色彩的なアルモノニー（ハーモニー）もこの宗教的雰囲気醸し出しているのに役立つているとも見られる。これが幸福というのである。

ねころべば昼寝になっている

老齡のせいでもあるであろう。毎日の病妻のみとりの疲れがねころんだつもりが眠ってしまったのであろう。それが緑平の生活である。

嫁が朝々茗荷の花添えてくれるのも八月
食欲をそそるすがすがしいものがある。

朝の露のこぼれている草の花を仏に
敬虔な迫るものがある。句がいきいきとして新鮮である。

今朝もひとつ朝顔しんから白く咲く
この“白さ”に対して知らずに手を合わせて
そうな、みどり子の眠った顔を見るようながある。

シャツもステコもぬいで雑巾縫う

人間を裸にして緑平は人間の存在を打ち出して見せる。善いも悪いもない。美しい醜いもない。人間の存在がある、緑平は言うのである。

母の日お花に萼の花をきる

母に対する追懐である。緑平の尽きない感謝とよろこびである。

山頭火忌手の荒れをいたわる

山頭火に心で愚痴をこぼして話しかけたり、自分で自分をいたわっている緑平ではある。

灯を消しふたりのまるい月

“こんないい月を灯りを点けていてはもったいない”と緑平は灯を消して病妻としみじみ月を堪能するのである。妻と二人である。自分の心境と一体になってくれる妻と。

誕生日好きな柿ひとつ柿の木から貰う

自分の誕生日祝いに、庭の柿の木から柿一つ貰って、自分で自分の祝いをしている。このつつましやかな無欲淡々たる気持は、高僧に見られる気持に通じるものがある。緑平の辿り着いた道をたたえたいと思う。

誕生日というたところで髭剃るだけのこと

左の句と同じである。

誕生日母につんでもらった思い出の爪つむ

緑平は自分の皺だらけの爪をつみながら、知らずに童歌を髯生えた顔の口から転げ出させていたのどるまいか。緑平よ、ゆっくりゆっくり、爪をつみなさいよ。童歌もそして爪切りも、いつまでも続くように。

しぐるゝや病妻も目を開けている

物音にふと妻も夜中に眼をさましたのである。それは屋根にしみる雨音であった。緑平の方を向いて妻が「雨の音ですわね」に、「しぐれだね」と緑平が返してやる。妻も緑平もそれからしぐれに聞き入っている。しぐれの寂寥の中で生きていけばこそ与えられる幸福であろうと緑平はしみじみ思うのである。

落葉する緑平の生活これでよか

「枯れて落ちてゆく落葉」そのあわれさはわたしも同じではないか。自然に随順する落葉、それは生命あるものの辿り着く終着駅ではないか。人間は不幸の人生の生活模様を描きなが

らその終着駅に辿り着く。落葉は自然の理法に摂理されて、枯れ朽ちて永遠に帰してゆく。何ものかに摂理されて永遠に帰してゆく、何という安らかさで絵あろう。わたしとても落葉のように、何ものかに摂理されたらどんなにそれは安らかであるう。そう思うと、「緑平の生活これでよか」である。

誰にあげようぎんなんひろいためておく

「緑平よ、わたしに出来ないか、」と言いたくなる。だがわたしには資格がないような気がする。あなたは、そのぎんなんをあなたからもらつて、心をわくわくさせてよろこぶ人、すがしい心の所有者である童男童女のような人、そんな人でなければあなたのぎんなんをもらうのうさわしくない人間と思うからだ。

国久君来訪

生きとるから逢えもししぐれの音聴く

緑平にはこんな芭蕉的な幽玄な美しさをの持ち合わせがある。その幽玄が芭蕉のそのまゝでなく、芭蕉そのまゝでなく、緑平化された幽玄である。こんな句が随所にある。「落葉する・」もそうだ。

ひとつやいてからいも半分ずゝにす
子供が「ほら、半分あげる、」というような
淡々たる心境である。友情にも愛情にも通ずる
心境である。

*庭の落葉で焼いた芋なのであるうか。その
焼き芋を縁側の妻に半分にしてあげる。芋を割
って湯気のためはかほかを妻に、緑平と妻二人
の笑顔と幸せが見えるよう。(広隆)

屍見せたくないカマキリ雨の中あるく

これはあまり悲惨ではないか。死を超えるよ
うな願ひ人の胸を打つものがある。

先に死なれぬ残っている歯をみがく

ぎりぎりの句だ。左の句と同じ胸を打つもの
がある。

死を知ったカマキリ頭に手をおく

「頭に手をおく」には、かまきりがよくやる
動作で、それが、「死を知った」時のカマキリ
である。そのかまきりの動作の中に自分を見て
いる緑平ではないか。

まだ死ぬことが残っている水をおむ

この句はまだ私の手のとどかぬ境地である。

このような環境におかれないと、実感として緑
平の心境は理解しにくい、生命が終止する前
のぎりぎりの終着駅に辿りついたことは解る。

からいも買いにうしろからついてくる影

貧しい自分の生活の自嘲もこれは余り寂し過
ぎる。ただ、自嘲に終止するのではない。「か
らいもを妻にわけてやる、食べさせてやる、」
との入り混じった自画像と言えるところ。

寒かけんからいもば一つずつ焼く

これは火鉢の火で、さつまいもを一つずつ焼
くであろう。二ついちどきには火鉢では場所
が狭くて焼けないのであろう。こんな気品の高
いさつまいもの句は見られぬであろう。

カマキリ死場所さがしてあるく風のなか

正視するに堪えられぬ思いがする。

もはや執念なくカマキリ風の中身をおく

解るような気がする。緑平の心境か。「死を
知ったカマキリ・・・」と同じであるが、この
句の方が永遠に身を任せた大往生の姿が見られ
る。それはカマキリでなくて緑平その人の大往
生であるようである。

しぐられ生涯を終わつたカマキリ

カマキリに自己を見た緑平の自画像である。自分の死を凝視した緑平。これまで自分をいじめないでいいではないかと言いたくなる。"しぐられているているのが自分の生涯だった。"

やっぱり生きとらねばならぬ髭剃る

ぎりぎりの極限生活である。そこに胸打つものがある。

*死を見詰めた緑平ではあるが、妻を残してはと思つたに違いない。"髭剃る"に並々ならぬ思いが感じられる。(広隆)

これがお別れになる日記の重き膝におく

はらはらめくる日記のなかの山頭火の顔々
その手垢の跡も山頭火の顔になる

日記と別れてからの寒い日がつづく

これら四つの句を、大山澄太氏はこう言っている。"亡くなつて二十六年も起つているのに、手垢のついたあんたの遺品として、肌をはささないでいてくれるような人がまたと他にあるであらうか。山頭火が二十冊の日記を託したのは、この世の誰にも言えないことを、緑平さんだけには知つていて貰いたかつたからである。そしてまた山頭火が孤独に耐えることが出来たの

は、心の中にいつも緑平がいたからだと思はう。"

大山澄太氏の言葉に同感であるし、又上記の四つの句の適切ないい解釈でもあると私は見る。

山頭火忌ひろうて来た熟柿供える

自分と最も親しい肉親であるような場合、自分の子供に対するような場合には、このような場合には、このような気安さの行動、無造作な行動がとれるものである。緑平は山頭火に対してそんな気安さと無造作を受けることは、何よりの満足であつたに違いない。二人の友情のさわやかさがひしと迫る作である。

ひとりは坐りひとりはねて年ゆく

"ひとりは坐りひとりはねて"というように自分も妻も二個の本物の物体のように客観的に描いている。この表面さりげない表現が、妻は脳溢血の半身不随で長年の病床で、話も出来ず、自分は、長年その病妻につきまきりの看取りをしているのである。このさりげない表現の背後にはこのような内面性が存在するのである。長年経て、あらゆる苦悩は克服してきていて、又、克服しなければ生きてゆけないのである。その

不感症になった感覚に、
“年ゆく”ともなれば
人生の悲喜こもごも去来することであるう。

十柿舎日記 第四十三卷
看護日記

水仙雪から仏様に切る

心境が勝ち、芸術的なムードに欠くるものがある。心境清浄、こうならなければならぬと思う。

餅がうまか一つ一つ焼くがたのしか

孤独は寂しい、避けようとして避けられない、仕方がないものである。しかし孤独の悦びもある。楽しみもある。

八十一似合うて来た前垂で手をふく

“八十一似合うて来た”、何というじみじみと心の底にしみこんでくる言葉であろう。前垂れ姿で病妻を看病する緑平の現実生活が丸彫りされている人間の哀感像が、読者の魂の髄に食い込んで来るのである。

十柿舎日記の一月五日（雀の生涯九二頁）の文
“母屋の縁にあたっては陽をしままほって

置くのも惜しいので布団干す”

この言葉の中にも緑平の人間性を知ることが出来る。人間としての成長というか、何か高僧のような、自分を投げかけて任せてしまってもいいような、そんな人間性を感じることが出来る。

湯加減もほんに初風呂のふぐりがだらり

“ふぐり”を描いてこの位気品高く描けることは凡手ではない。浮世絵において、春画を描いても、それが気品高ければ、“凡手ではない”と批評されるようなものである。湯上がりふぐりの自然と作者の心境が一体化していることである。

どちらが先に死ぬにしても月に寝床しく

美をもとめ、美をよろこび、美にいだかれて死んでゆく、作者の本懐でもあるうが、俳人としても願うところであろう。一茶に“死なば今草葉のかげの花と花”（この句言葉が少し違いかもしれない）。西行に“望月の花のもとにて春死なむその望月のきさらぎの頃”と故人も美に抱かれて死んでいったのである。しかし、人間の孤独の哀感が身にしみてくるのである。